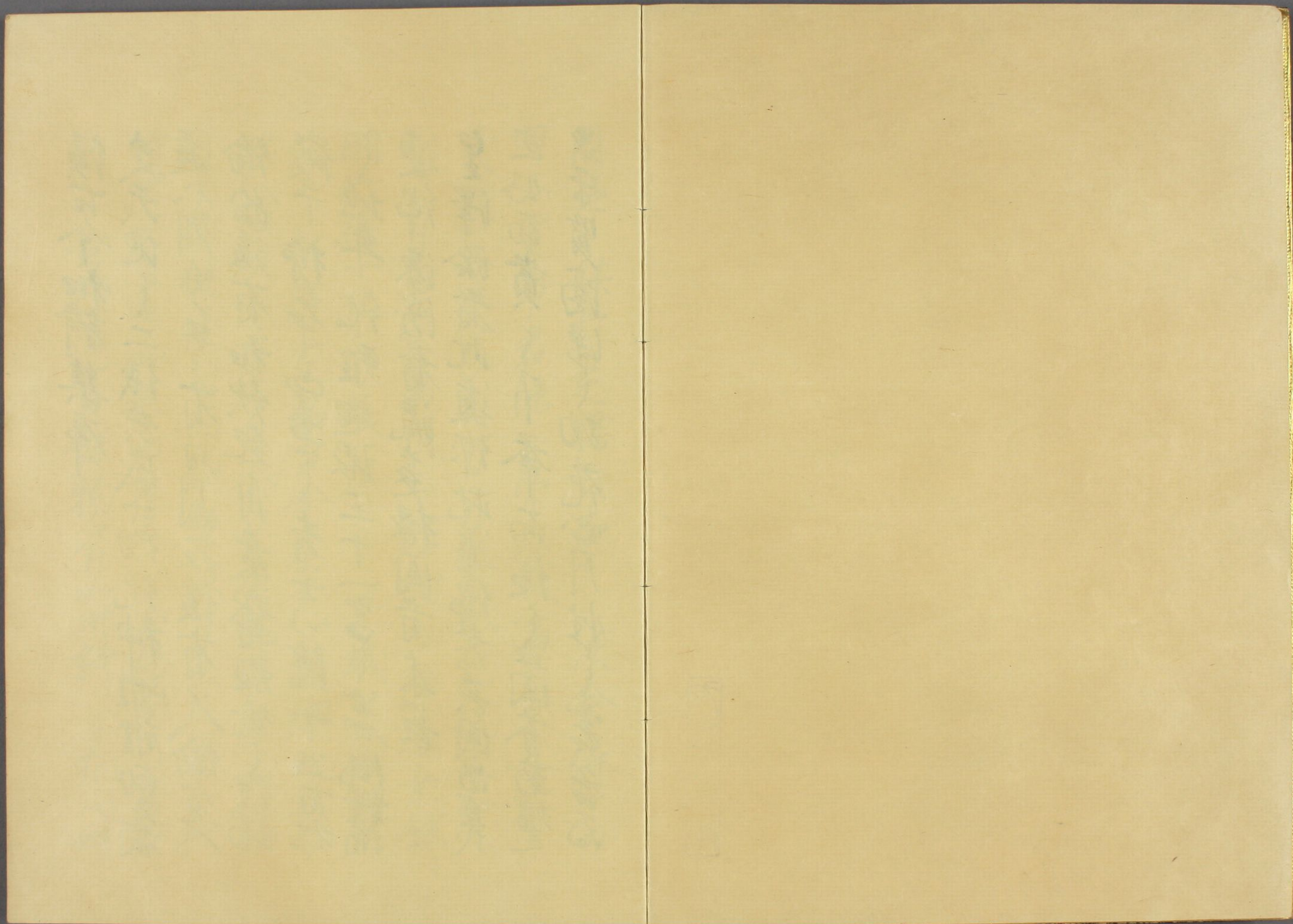




續古今和歌集上



天
下
文
庫



續古今和詩集序

夫天地之二儀共成一物化神雌雄兩元相
遺八州分号有日月然後有人倫有人
倫然後有和欬起自素鸞班鳩之往躡
被干梯平山為之秀士以降千五百秋
之地年紀雖廻環三十一字之篇風體猶
連綿源浚者流遠根固者木長

皇澤洽者此道作此道絕者其國昌冥
上好而貴之下舉而後之蘭芬菊耀之
又牙質陶深之功苑心月性之容者為

周遊之媒於是總政事之次命侍臣而
曰 皇帝君臨之第六載遍樂安寧
民黎子來而自万方皆獻苑祝衆正之
聖智易步萬枝之韻詢多陳屢采餘
因將撰一集万葉集者 平城皇朝課英
俊考被降芝詔古今集考 醍醐聖代勅
問人而歆傳百王自尔以來繼芳塵而總編
及十代挺佳句而類聚餘万首憲之性
時何有遺漏然而霍山之玉拾而不盡靈
水之金採而有餘物皆如此詩亦相同辨

賞延長元之勝跡殊卜枝幹相應之佳期
也者才也其性如宜虛厥歆有花葉吐觀
其過之即為新體也者土也其終始之陰
得綉結之居萬品顯自之又為新德云云
已同解曰德故古今集序曰和欵者託其
根於心地發其華於詞林上句者去也下
句者才也非去不生之故也此一句之趣
叙二字之理相當此歲恢弘我道兩代為集
有以有由哉 仍征前內大臣藤原朝臣前
大臣納言友原朝臣為家侍從友原朝臣

右大臣藤原朝臣光俊等之集
尊卑編素之作者皆究精要者合呈進
寂初萬葉集依為盪觸猶採之其後十
代集雖多綴玉悉深之伏惟道位於九
禁為文千二帝批花源之春菊花源之
秋苗去杜於姑峯之花之色青松潤之
風亦松潤之月移風月於仙洞之松之濛就
斯方印之石而握翫引彼端右之才而琢
磨摘華摘實深索風骨之妙式瓶式吟
廣披露瞻之詞取捨考得二千首部類

步為二十卷名曰續古今和欵集方今年
勵提携乃目不暫捨雖隨 後出羽上皇
之毅襟恥隔彼風毛中與之秀章而
今上陛下天文日新同肥仙院顯言棄於
芝砌中書大玉積韻花於李蹊不堪航道
之志愁聚難圖之句還恐令後之觀今勝
今之觀古於戲獻天生万物之初容遠分
年有回時之景趣亦好其外之雜類實
繁意端之感恩非一釋門之作神道之誨
緯在幽玄尤貴情素此中 昌泰之右相

者絕妙之上文也累代之集雖加菅氏斷
臣之号尊德之餘今載叢祠通代字終
摺之義蓋之備矣凡和詩者志之可之也
氣之動物之之感人情蕩於中言歎於
外輝麗之才以和理方有室國室之要
雙照古照今之華第一辭猶說命孔昭
德礪殷武帝之金徽諫不暗誠為唐天子
之鏡匪帝比之易之起衆燕亦將曰君臣
致合應蓋以三代古今之撰直為諸集
編次之良文永二年玄蔭季月大德

趣右筆而勤之介

わまやうしんそし素勢のむしれとや
あしはれよのまをりめてつる班鳩乃
こまをふはたしきとくそそみかりとよ
こしーらこのそそるものしらふお
らうれまーらひらうのよわらうそふま
ぬるとれいこうといふあまそとけりあさ
らとらぬらんみられむらきこねひとむく
あさゆへよの縁よあまうらんかえらあさといふ
とーたきけをさうさうのあさやまもた
かおねさう代え乃勅撰乃あふふの可

いりもむとくむくあまのりし人のみら
まのらちきりらくはむしのあつくもとの
はらむいけくめくあまよむじのむもさうく
花とまるとさなけりく　　かちゆくよむまむ
あまのいけくはらむありとられむせふとくを
あまむと福のひわらけくもまじくわくふあり
秋乃月よみらと何さくらめんとたりふれふを
て古今れあは紙あもめす宮人のともう
とささめくはいとゆる前因大臣友原朝臣
お大納言友原朝臣為家侍垣藤原朝臣

新家右大臣友原朝臣光俊あやこくふ
おやせて万葉集のうら十代集のあやとひら
くまらあまのいけくめてまのあま
らまじらむとくはらむとくはらむとくはらむ
新古今乃とくはらむとくはらむとくはらむ
をさかいけくこのあやとられむとくはらむ
とささめくふまらむとくはらむとくはらむ
あまのいけくはらむとくはらむとくはらむ
てつとくこのあやとられむとくはらむ
乃はらむとくはらむとくはらむとくはらむ

あはれりこの世の世にむかしはたまたまのひら
しつしつとていふやうな世にあつたやうな世に
くまふ井のうらむしつとていふやうな世に
らむしつとていふやうな世にあつたやうな世に
かたむらうあつたひともあつた世にむかしはた
しつとていふやうな世にあつたやうな世に
えらうとていふやうな世にあつたやうな世に
續古とわが業とらうりまの風志のうら
代はあはれとて世とみあつた世にむかしは
その世とていふやうな世にあつたやうな世に

あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
はらうとていふやうな世にあつたやうな世に
とりらていふやうな世にあつたやうな世に
その世とていふやうな世にあつたやうな世に
のつとていふやうな世にあつたやうな世に
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ
あはれり月をわがみ冬にうらむしつとていふ

とまひてえりしよりのれりし事よれどもとぬるまひよ
うり其の足るなりしゆもいふるにむし
とれぬるれいふゆすかゝるいあふいおれを
のそれしう綴るる事よけりすしとてか
よいしとぬる事よめえはるのゆかりた
らとらよあひあひしてそのことら
そそまらるる事よけりすしとてか
はるあふりしゆりてあふりてあふり
つらりよそのれをりなりしゆとてか
うとらとらよゆをせらるる事よけりすしとてか

勅撰もあひいふありし事よれどもとぬるまひよ
とらとらとらよ菅義相の延壽よりとてか
雲のうんれえりしゆり天曆よりとてか
とらとらとらよいふ事よけりすしとてか
杉のけりし事よけりすしとてか
とらとらとらよいふ事よけりすしとてか
ゆらよあふりたふ事よけりすしとてか
の集ふことらとらとらよいふ事よけりすしとてか
ゆらとらとらとらよいふ事よけりすしとてか
たの目る人この業とてらとらとらとらとらとらとらとら

續古今和歌集卷第一

春音上

之去乃心とよみ侍り

前中納言之家

名ふたさあまれくさかあけう雲おふりあまやう

崇徳院よ百そふり侍りける去年

藤原清輔の臣

つらりと此通ら地をれいひとよみ侍りける

右大臣よ侍りける時家よ百そふり侍りける

よき去り

後法性寺入道前雲白鳥

とわかれの夜なりをそとよみ侍りける

去立ん

土御門院の臣

初あきの夜なりをそとよみ侍りける

初去来とよみ侍り

前大納言の家

後緑子とよみ侍りける

寛治二年の春よ早春の夜

其上天皇

よこらまはとよみ侍りける

春音中に

中務親王

おがりのらね松平もいせもいせのいせもいせ
百三十九年みゆけりふま年

光の宗もいせもいせのいせもいせ

久松大夫のいせもいせのいせもいせ
初まのいせもいせのいせもいせ

いせもいせのいせもいせのいせもいせ

中務の親王

風はゆるいせもいせのいせもいせ

春雪と

前開白た大臣

今もいせもいせのいせもいせのいせもいせ

建保三年内裏よりいせもいせのいせもいせ

前中納言定家

鳥羽川をいせもいせのいせもいせ

いせもいせのいせもいせのいせもいせ

おがりのらね松平もいせもいせのいせもいせ

百三十九年みゆけりふま年

いせもいせのいせもいせのいせもいせ

建保四年のいせもいせのいせもいせ

光の宗もいせもいせのいせもいせ

鳥羽川をいせもいせのいせもいせ

美由方申に

順徳院御年

予の誓や... 我枯る言風あふ... 我の徳系
正し... 権中納言長方

み... 正治二年百... 我徳系

前大納言忠良

あふつ... 文永二年七月... 申す...
あまた大信

消... 下... 申す

あふ... 前大納言長方

わ... 我... 徳系

後... 後二位家澄

お... 土御門院御年

あ... 誓... 申す

白... 小松系... 申す

龜院乃山時むゝるれの子日ふ

平慈威

子日とく君山くわあめしゝんくめいひんかゆか

義保四年申亥子日

贈を政大臣経実

めわしとく君山くわあめしゝんくめいひんかゆか

子日乃んと 大上天皇

子日と子成の古名記もめて青とくつ松とひん

建長六年二月方合よ書と

大分れ書のをとくとくをてとくしまゝぬ書か

書乃山方れ中に 今上御

りらとりし物とくとくをてとくしまゝぬ書か

道助は親王家五十首方よ書中書と

入道前を政大臣

書とく山方れ中に 今上御

西園寺入たおを政大臣

おとくしあまぬ書のを親れえよつりふたりふ書か

道助は親王

おとくしあまぬ書のを親れえよつりふたりふ書か

書の際けり日書乃鳴と

上東門院

萬にもふゆふ雪ふもやありとわるとぬ初めは
雪中梅苑とてうらやま

苑山院河守

梅のえにふりてふ雪の白きとやしらむとていけり
にありとて 友原基俊

およむらんとせむ雪ふもぬ初めの梅とてを
正治二年ふてまつりける百々れ基俊

皇太后宮太后成

子藤のしるおりのもぬぬらんありとの水若くあり

元治五年月々 後二位家澄

まやとれむの初らぬのして雪けり月風とあがす
建保四年まつりける百々れ基俊

入道前太政大臣

はにむと梅の橋原けり雪けりやとてとて
去河門内久にありて雪ふと

藤原澄信初代

後みより雪ふもやありとわるとぬ初めは
題不知 山崎宗人

ゆふの月ふりて雪ふもぬ初めの梅とてを

柳本ノ丸

くふえの明らけぬとみよせふ松のふもゝあゝあゝ
弘長二年百三十九すこと

中務ノ親王

まよそいふこそほじ白きありにして一層の松
百三十九すこと

順徳院御方

波りより夕白くわろす松のうらうらうすまはる
建仁元年三月方合よ霞浦遠樹とらふ

前中納言定家

ふとふくまぬ破の松たをみくともあつてすむ
むとふ知

後鳥羽院御方

ふか海の浦れいこり曙よあふのころは海はす
ふゆふ人あふとやすじ人難波のうたまのあは

五十九す方中いけしる

今上天皇

乃とていふわい海のうたまの浦はすむと
元久約方合よ水郷春望とらふと

醍醐入道前太政大臣

まの松たあまのそらあまのいこりいこり

百々方よりゆきに 皇太后御安事後成

わうく急ゆきをそそむる事おはる白鳥
後二位家隆おはる浦原よりふりて

ゆけり

友原光俊御下

山平姫のこし浦原吹わしすの神ふりて治

都一らす

中務の親王

そら海北のらとやすむんやぬきを屋よき

大納言経信

煙多のあまはゆきをみえぬきてあふりふりて

伊予のあまはゆき

順徳院御方

難波のこしひらとやすむんあまはゆき

名取百々ゆき

わの屋はあつとやれりてはゆき

朝霞と

後二位家隆

美乃新におり月よの名はゆき出づる白鳥

洞院持政家此百々ゆき

光のあまはゆき

春はるあやゆきをみえぬきてあふりて

月花門院よ梅の花ゆき

今上御方

君はそふとふくまをわび當とこころから梅は白ひと
建長六年二月三日合し梅

中納言為氏

はらふとゆは梅は花はふふ人たのむま
曰且このまを合し庭梅とふと

院入納言典約

ころころ宿とふは梅は人あめあふふ白ひん
二百首の中し中務親王

きふとふ人しとてやとふおだそめ梅は花の整
寛治元年二月廿八日御入内屏風

入道前太政大臣

整とて白ひよそりふおだそめ梅の花は下風
寛治二年百首の中し梅董風とふと
あつ梅は花は整とてふふ白ひん外ふふ
西治二年百首の中し

前中納言定之家

打とてすなるとふふ白ひそ名の整は梅え
梅可とて友原義孝

善風乃定とて梅は木と名の整とて白ひん
亭子院御所の梅は花の整とて梅は御

らん—ふらう—世路ありける時ふゆり
伴野

ふいそくみよこらるる梅の花は白ひのふゆり
兼景殿の女御おのふゆり

平惠威

我宿よ吹か風よあつらふこの梅の花やらん
更衣元善ふらうあつらふ日

光孝天皇御前

梅の花らりあつらふふゆり
むふ知 栞中人丸

我宿よ吹か梅と月影ふらう
梅花とふゆり

衣笠前月丸

ふゆりあつらふ月影ふらう
百首あつらふ 後京極坊政前
あつらふ雲とわらふ言ふとわらふ
柳とふらう 山色茶人

岩柳を 大納言通方

淡緑あつらふ柳のふゆり
あつらふと緑とふゆり
あつらふと緑とふゆり

百三十三号中記 中務親王

ひびくふもむさふより形を風の吹上よあそう玉を
前代若末徳教定 柳

露もふびとやれらるる柳のいもみられて春風吹
道助は親王お五十号の方よ春月

後二位家隆

雲は程りの雲風吹く露よゆるすおむら月を
中務親王家百三十三号中記

中記言

うねりあらうらのねらあむらけさよ春月れ

坂久我前々政大臣家十号奇

土御門院小宰相

雲は程すむよつ巻てふさよき表とす月乃春
春夜乃月とあ

権大臣云形朝

月を巻らすむいとうささふて雲は何れといふ
中務親王

おどろ風は巻あけてあやめ神よすあさ雲の月
後二位家隆

山平那の雲は神を誰あへよむらふよささ雲の月 ひ

建保四年百々此方ふき奇

入道前を致大臣

月のうらひさきいけりてくわらむと行くと心も

降初とある 衣笠前内大臣

あつとすめりてそのめい月とあつて物なりと

子百書方念ふ 二條院禪師

ふりゆくとらふ書やさじとる書とすはあらね

書方中に 後二位家隆

あつ中いともららけ玉つとあつたえおら書物と

後東極持政おを致大臣

今いそとといふかり念のふとてあつてさ致の念

子首方よとあつてり

前大納言為家

あつととあつてもいさやとてんけくといふとて書

致方とて た大臣

あつとあつととて極致するといふのといふ

後鳥羽院女御

あつとあつととていさやとてんけくといふとて書

後堀河院内侍

あつとあつととていさやとてんけくといふとて書

建保四年百首言ふ 後二位家隆

梅の花咲ぬとさけいづるに花のよきは心よきと

まよふとふとく 順徳院御歌

白雲や花よりふふゆらんさくそなたきつとさ

ふ五百書方合年 久慈卿有家

わつとやまれば山の花より雲のそとくとも

新踏鳥花とふとく

右京法輔御歌

ひまに花の梢はぬふとりのよきにみえつとる白雲

此方中に 藤原雅有御歌

花のよきより花の白雲やうさく花の梅ありん

右宰相大貳守遠

白雲のつれづれとみえつとる花のよきあり

入道前太政大臣

梅をぬる花をぬる花をぬるやあまのまはあり

法成寺入道太政大臣家屏風御歌

右京長徳

あつとまふとさしひなゆさくふらきつと梅あり

右京長徳とつとくあり

前中納言家

日ふくはるのちれ梅の花さる光とくわさる
建長六年二月之首方合。梅と

前太政大臣

雲とみふくす花さめふぬよきり梅よる

きのぬれ

續古今和歌集卷第二

去奇下

飛山の地洞よ吾輩のちれ梅とあまこも
くゆくく歌乃はきくとんく

乃上天皇

春よのこひやほほ二吾輩のちれくふく宿ふ咲れ
家の方合よとられ

中務親王

押非色の梅やふすらん家乃袖の花ふく
百そ方くくはくせゆけくふ

洞院拵改た上旨

多々やめし家の神や白くらんおりのまに花の白雲
前大納言為家

とをあれ家の様れもろくそはへけて白雲
清徳二月拵寺乃花刃のけり所よみ得
平兼盛

山様何くまて色とろくおむらるる色風あつぬまに
建曆の比南殿乃よれ志のひて水らん
こととそよまをせ行けり

後鳥羽院御方

吹風もたさまわつ伏の道にさひむみつ河をまらお院
建長六年二月二首寺合り

侍従新家

のりそをあぬのさかへつるや也小そあは
苑方中に 右近中将経平

善やとれ善乃日教とさふそ花をけあぬ
實治二年百そ方よ見花とふん
上宰相帥為経

刃くそ程あつ乃をさすれ永日おろとあぬ様
新司院棟家

吹風のしほ家へいそぎやけりしよりとあそび歌の陰

右二首よけりつ河百首よふむとそよふ

後江性ち入道前書白歌

しほまゝあそぶふとけ我宿れ歌う人の情なりたれ

花月百首うんふいふませけりつふ

後京極坊政前太政大臣

きふすい庭や夜のいそぎ人そふ人の歌れ歌と

弘長二年十首う禰しゆし小静思花

とふふとふと 今上天皇

めしせぬ宿の橋れ歌登我ふしからうしそあそ

前関白たふ

らぬまの歌の陰と書と日光乃んそ相ひひ

衣笠あ内大臣

たみくと書れぬのけけい老て世よりいそあそ

建保元年内裏詩う合よ山中花々

前中納言定家

さくしり歌れぬふくふとあひまよとせりあそ

曰二年の約方合けりつ河上歌と

歌のそれおそあふしとさかの常と白ふ宮路の河

久寿二〇二月人丸歌と清輔朝臣と傳

けり阿蘇下言志とらふと云

大京寺文形補

命建におりくる言ふわいおきとほしり好むる
建保四年の百と云り

入道前太政大臣

仰りぬ言と云ふとらとせわくれくよきうあん
苑の四方れゆに 坂馬羽院御寄

とく驚と末登入りし様よりとくゆよ苑のよきまて
苑と云と 氏部と成苑

苑の苑よ言がとくく夫代入人れと云くゆ

亭子院寺合弁

在原元方

あのみいと苑のんてとらわらぬさ苑り亭子
苑と云御時東より水屏風り

貫之

いんけいあすといの橋苑らり人後そくを苑り

西園寺あくく苑寄のりこくみ結く中
入道前太政大臣

この里様と云くたふあつ部そくすし云ゆを
たふあてと身そゆりまらる様苑とてあき雲よゆて

弘長元年百三十八年
前大納言為家

うららかにさすむ山梅の花と雪をひかへて
花のほころびんちりけるうらやまづり

月苑門院

琴のなほこほのほもふくは年長はまはる人のこほ
ほみよほらりけり

堀河院中矣

さねらうらむとさそ梅の花つひの人はあはれおほ
日吉社へ五十そ水さそそまられけり

後鳥羽院御奇

若殿山様ふらふりうさむはとおろれはさるる
むらさ

正治二の百三十八年
後京極拾政前太政大臣

やまのそほらん物さのほらひさしうら月と花はゆら
百三十八年中に
九条太右衛門

咲白ふ花と光よりさへて木のみもと出るまはれの月
月乃は内裏の女房西園寺のほみよほ
らりけり時少将内侍り

入道おとせぬる旨

あすみろ新の本州より月小面新より雲れ上人
まふりれあふに 春後漬平

らり心新の鏡のあれおふふこしてつらまふ新
月前落新よりつらこくよみゆける

内大臣 冬忠

今こそ月をみおやむむん新らつらありのあつを
子五百番より余ふ 二条院横波

しんよまの立のふらむや月おむむん新のまを
日暮新よこみこあそよりけりつら余ふ

正三位知家

今こそ書よりつら鏡のあつらつらありのあつを
むらす 躬恒

まふりれあふこ日たしと横新らつらありのあつを
西院皇居文太御門右大臣家よれりま

けりつ三月様のあつらふ上を都殿上人
まふりてあそひをにらけりそ

大納言経信

あつらふあつ風のあつらつらつらありのあつを
あつらつとて 鴨長明

ふしのうらみそよみさうり首風は梢をさへぬむかひ
百のうちに たふは

うしろ風のやうにさへぬむかひのうらみ
前用白たふは

山標をたふのうらみそよみそよ風のうらみ
むかひ

うらみそよ風のうらみそよ風のうらみ
文永元年内裏よりあてしうりけり百のうらみ

うらみそよ風のうらみそよ風のうらみ
大納言良教

子丑百番うらみ合す

大納言道具

吹くぬきのうらみそよ風のうらみ

夏秋門院丹後

善風はうらみそよ風のうらみ

陽明門院乃姫交りゆけり内より

うらみそよ風のうらみ

秋把皇太后

うらみそよ風のうらみ

うらみ

式子内親王

式子内親王

夏はらとらるる類は風吹くまはるるあはれまはるるね

正治二年をりけり百をまはるる

前入御云忠良

さひねのあらしよ白くもくらしきりしをあはれまはるる

巨峰の院丹後

千もはらむらるるのあはれけのらるる風をまはるる

春方とて

人丸

らるるよといそく人丸はまの千もはらむらるる

躬恒

らるるに何は物と様もまゝお揃のつゝあはるる

道助は親王家五十五そまはるる

後二位家隆

山標あはるるのさひはあはれ神もまはるる

雨中はあはれまはるる

後鳥羽院御方

心標のあはれ神もあはるるもまはるるあはれまはるる

あはれ思はるるまはるるあはれまはるる

あはれまはるるあはれまはるる 一条院御方

あはれまはるるあはれまはるるあはれまはるるあはれまはるる

寛治二年百三十一

前内大臣基

身ふて之いふはまこといふもあはれもあはれ

花亭中に 入道前を政大臣

行もまてはゆふのいのもはらそふ風身は

源俊賴の

ふけの風やんこくまははらぬおのねは

祝部成茂

若狭川もよもやまらるらんちのあらそふ流の

延長十人の亭子院を合可

海上是則

あなよまのめもいふれいもいふれもあはれ

むふ知 山色赤人

まの聖ふすれいゆに我そのとふらむ一

夕葉葉のいふと

海上天皇

浅茅生のをれ芝生乃り露よ葉つじそわら

河敷冬 後鳥羽院

玉川の流れ山吹もみそそふらう波ふらふ

文永二年七月七日

ふらん〜せゆ〜小嶋歎冬と

藤原光俊下

嘆白ふ鶴うらさる山吹や屋そらら人のさ〜

田舎歎冬と 侍賢門院堀河

嘆よきりなり〜水よけみえそ田中井とのさ〜

歎冬と 多きお内大臣

ふらん〜さるれそ〜よはさ〜

岸歎冬と 前大臣公家

ふらん〜さるれそ〜よはさ〜

細代按察使百と お中納言公家

白ふらん〜さるれそ〜よはさ〜

先の累も入道前按察使内大臣公家

首よ暮ま〜

美ら〜さるれそ〜よはさ〜

白ふらん〜さるれそ〜よはさ〜

前参議忠定

極め〜この末聖乃々家そら〜

友死と〜侍り、中務の親王

嘆よきり〜さるれそ〜よはさ〜

正治百と〜 後二位家澄

おきけしお取りてふらんははは津岩ねふはな
部しらす 貫之

とれらる木のふたふあやあしとくまなふりてお
三月つりのまの日は元と

延喜御奇

久きあすふあふな波のひてのこまきとたれあ
建保のこ百そふなりし時

慈徳大僧正

なふゆふまの別は行なそとふもたれふら
言春のころとよませ給ひ

後三条院御奇

ゆきのあはれは海つゆかあふ故のたれら
同三月元とふころとよみ給ひ

右原光俊朝臣

まねのあふひの月の巻とてまのそまねと
二月書りしと

右近大将通雅

はらへてはくともい行ひん身よはは
大いふ里

われは我身のみいふにけりなむけきまはるる

在承元方

光おほいまはるるもけりなむけきまはるる

入道前右大臣

人の光おほいまはるるもけりなむけきまはるる

光おほいまはるる

續古今和歌集卷第三

夏奇

更衣のらとよませ給ひ

土御門院御奇

このすそとよませ給ひのらとよませ給ひ

文治六年女御入内屏風より

後京極坊政おと政

きふらひ子成とよませ給ひのらとよませ給ひ

首受らんと 中務卿親王

花深の神さかふらとよませ給ひのらとよませ給ひ

二百五十五号中記

雲乃かるといふを撰らるるものなり

妙苑のなり 大上天皇

あつたあつたのいれを撰れたるものなり

源俊賴卿下

撰らるるのうらむいれを撰らるるものなり

弘長二年百五十五号中記印記

中務卿親王

あつたあつたのいれを撰らるるものなり

恒邦卿と云ふ 大近中将家持

撰らるるものいれを撰らるるものなり

文永二年七月七日記と云ふりて二百五

十五号中記印記

大納言為家

外記のまゝのいれを撰らるるものなり

夏号中記 後二位家澄

しむ子ゆつたのいれを撰らるるものなり

義元二年孝安使社ありふと云ふりて

二百五十五号中記

前中納言家

さひやふりけの燈はあつひ兼君とふくくふく
堀河院御時百三十七年

祐子内親王御紀傳

年とてまらねをよめあひ兼君とふくくふく
御一らす 小弁

はさねもよまらねあひ兼君とふくくふく
郭二月とまらねよゆまらねとふくくふく

前大納言公任

月とてまらねとつづあひ兼君とふくくふく
起ふ知 天曆御時

くつらまらねのあひ兼君とふくくふく
院御時

河原も思ふあひ兼君とふくくふく
英治二年百三十七年

太上天皇

月とてまらねとつづあひ兼君とふくくふく
家よ百三十七年

洞院抄改たる旨

常におつたの竹はあひ兼君とふくくふく
中務卿親王御時百三十七年

源具氏朝臣

河内守より下りふとて時をたれさ月をうらふいしむるは
建長三年十月より方合より

衣笠前内大臣

ゆのめねと我のこ約て郭へつまふれ押といひて事合
百より方合中より 前右大臣忠

約といぬら成さるのねえあう山郭へさるひあかん
り前守に 後久我あまの御大臣

郭へ三梅の神松とまきやとてさるひのれ雅為
延久知 皇太后より大平後成

郭へ約り言れむいささるぬはさの袖おじり
祐子内親王

ゆら河守やふいりて河内雲ぬらとすさあ
大御公雅為ゆのめて約きりり言郭へ

乃あくとさて 小た道
さうほや山河内一都もゆてしたのひらあらせ
延長十其の内裏屏風前

凡河内躬恒

郭へよつと都の月約とおきていれねぬ人さきけ
日中河守とてまつりけり方合中より

書

町名まゝの町名をせしむるの置は月ふふらん

郭と

月花門院

ゆらぎの宿もさして町名を云はしむる月はたえ

くふもせしむる百も小郭と

中務親王

一都とあすは月よ鳴はそそふのともさ郭と

山崎郭と

ひやとせしむるの町名は戸一都は月よあはなり

都

山崎赤人

足曳の屋へさして町名を郭とせしむるは

中納言教忠

わらわ物とせしむる郭とせしむるは

正治二のころふ百もさしむるは

ませ給ひ

後鳥羽院御

卯の陰ありせし町名をさしむるは

夏は山崎乃中

祢はゆらぎとせしむる郭とせしむるは

内裏は百もさしむるは

中納言為氏

あつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
西園寺入道前と改大長家とては名を郭と
とくふとてよみゆけり

前大納言の家

今まの神はあつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
弘長二年飛山仙洞の十首よ聖外郭と
と

侍佐の家

今まの神はあつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
五十首よりよ寝覚郭とと
お大納言の家

郭とて一都のしめやすむよとの子す光のね境
弘長四年百よりよ郭とを

入道前を改大長

あつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
達もみよのころよりよ里郭と

墨屋入るお改改を改大長

あつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
権大納言の形家あつとつりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ
て子首よりよめゆふと河を卯月とひて思ひねそ

友原信実の下

約平あをふま出てさけい河名山のいふいふいふいふ

夏方中に 先後朝に

あそころととらるるあそ河名そととこのらとたなとて

一身は師

ゆさふぬ人のあめふ郭云く夜鳴も袖着あそ

津守四平

弟あふふとまこや志ある時をさ月ととらぬ垣とせ

寛治元年十首方合よ五月郭云

土御門院小宰相

里わるとなげや五月の河名あひいふいふいふいふ

新方中に 中務親王

下ふと人の心とるいふととふふとせとら山橋の那

前大細云為家

新咳一時のまれとあそとて我身やいふそその

建暦二年二月南殿のむと志のひて水

らせふとそ 後鳥羽院御方

我ふとむよのまれいそあそとても白雲れよの

泰後雅雅

あわつあふみうつとらんむのあそぬるふ年れいふけ

弘長元年百首方よ新と

前大納言為家

いづの太田山乃様花面ひけりてみぬそめり
文永元年春物鳥尾の記とのひてみ物
時
太上天皇

たつこきふとう白神世代乃昔此記の下に
此の

あまのりやうれゆらる記されとふとう記なる
記しらす
後鳥羽院御方

たつゆらる世あまのりやう記されとふとう記なる
中務の親王家百々方中し

友原光俊朝臣

浮世もむくくくくくくくくくくくくくくく
皇太后受て手後成三梅社とて今に
の事せゆけりふ
権中納言定方

たつこきふとう白神世代乃昔此記の下に
弟唐の前よ記の記とて今に

あまのりやうれゆらる記されとふとう記なる
友原信実朝臣日吉社とて今に

けりふ山花
祝部成賢

梅の花をまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風
文集。百花落如雪の質を伴系と云
と云と
梅家使澄懶

忍ふそ昔のさけりしよよ白ふ春風とあり
澄のしつとけりしよよ白ふ春風とあり
よみゆりし
西行法師

わさそむ老木の世を哀ふりしよよ白ふ春風とあり
老後花をまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり

前律師 春暹

花の色を今にまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり

花の色を今にまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり
権律師 他免

面影のさけりしよよ白ふ春風とあり
前大納言 伴平

昔のさけりしよよ白ふ春風とあり
伴平

りよそ小径の昔をまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり
わさそむ老木の世を哀ふりしよよ白ふ春風とあり
前中納言 澄家 雲林院の花をまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり
花の色を今にまじりて白雲のさけりしよよ白ふ春風とあり
けしき
小野 宮右大臣

折ふ此部束を今忘ぬ身は恙とうう海をいさう

花方中に 西新法師

福うくいもの下をそほふんそのさけきあら月

夕花を 有原伴長卿下

みくも程あぬんの時やういりかまらう花の糸

尚書舎をこひゆりつ時

藤原清輔朝臣

らう花いほの恙ともまらぬり又とく運らわらり

子丑百番方合よ 前中納言定家

様花うろふ恙と何もうくくみらふりわ後兼実の

恙方中に 有原為徳朝臣

山陰のふる本れ様思ふえ色いゆり末よ新の吹ん

百言方よむゆき 平政村朝臣

様むらうとくさりとこさ月いらくとみまや余ぬん

むーらす 藤原頼宗

嘆らうあひいとよ道いこ様整とみくも行まるか

平時茂

人志ぬみゆくれけ様花うろふらう恙やあん

平時廣

折めたぬんそれ物よこいゆりや花のらうん

土御門院小宰相

あはれなる我身ありとて橋をたのむるをそなたは
土御門院小宰相

あはれなる我身ありとて橋をたのむるをそなたは
百も方なりとて

皇太后女御仲

くさくさの別とてふもさびしうすまじり
言まらんとて 正二位女御

世と持てのららまといひしう首をさへぬ
ふまればやうさりとあはれおいては命あは

建保百三十九年 後二位家隆

老よれ我身は花のよみあまてはしつゝ
あのみこめれ方 源重く女

あはれなる我身ありとて橋をたのむるをそなたは
卯の若くはよ言のあはれとては
小野小町

卯の若くはよ言のあはれとては
郭公とて 法平良寛

あはれなる我身ありとて橋をたのむるをそなたは
源俊賴御代

そとせぬまゝの人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

素還法師

そとせぬまゝの人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

中務の親王家百三十一

有原基政

のあまをくま人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

後法性寺入道前実白右大臣の所これ百三十一

よ郭云

刑部の頼輔

のあまをくま人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

野ふ知

延長白屋文之輔

今をそとせぬまゝの人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

雅成親王

いづらふ海へくまの時多我もくまをよけぬ日

百三十一の所は 前大納言の所

いづらふ海へくまの時多我もくまをよけぬ日

夏多きとらみゆき

静仁は親王

なまらぬあまをくま人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

五月あまをくま人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

ゆづりの入るあまをくま人かゝる所もあまをくま人殺さぬ

名風と云ふ

は平家伝

夏より秋の緑の梢も中門の志らる風を春の
添りたると云ふ 平時親

夕暮のまゝいそやぬみおのほの意おしそく風
都らす 安前の侍志忠の作 涼

人志と云ふとあらねを輝ゆと云ふのとはいそ
六月後の心と 土御門院の作

みぞらと云ふ神よぬらぬおとあひくそ神よいひい
都らす 忠義云

なると云ふの枝の戸のめそはそ涼と云ふらけ

中務の親王家百と云ふは秋

前代共未幾教定

ゆと云ふ露なりやぬ我神の老い涙は秋に
実治二年百と云ふは早秋と

友原光俊朝臣
ゆらぬ身も思ひ秋の道はあり神よりし露を
結方中に 藤原秀能

ゆと云ふ海は露と云ふは思ひぬ衣ふと云ふは秋の初を
天台座主澄覚

風と云ふの思ひは思ひぬと云ふは思ひぬと云ふは

光の皇子入道前按察使

伊を落ちしうれ松原みよをせりし志をひて秋風をゆ
百をよきなりし時 海海と

前内大臣 基

松陰の入海して志すをみよと吹らす秋の志風

題ふ知

宇治入道白太政大臣

琴りきん程の志をねとせりし志をみよの志風

枇杷殿にてせりしのわきとれん

右京義孝

りよと約しきんせりし志をみよの志風

五十そりし志をみよの志風

後二位家澄

秋風よ朝の萩の志をみよの志風

題ふ知

権大納言 實

志をみよの志風

同九月雲白前大臣家十志をみよの志風

ふよませ約しし志をみよの志風

侍従 家

長月の志をみよの志風

河原院にてし志をみよの志風

惠書を以て

弟等も庭より望むるに秋の思ふ

秋分中に 源道深

いふに身はむねをありと老ておわぬらん

昔我の澄親

妹とてくさけりこの教りも海を老る思ふありけ

述懐の書れ中に 源為康の片

ゆりふり我りとゆひれそのこいみはしきる秋の初

二首首の書れ中に 太上天皇

思ひ友にともらるるこいしき我りとゆひの思ふ

日名よあてまうりける書合り

正二位知家

ふり露そゆぬ小菰糸みきん坂の枯れを

あさう初の花よつをそけりける

栗田岡白贈る致大臣

樽のけもむら露らとあけけらあき世よとる

返一 源英明の下女

人の世も露りたふそと女は福よなりあきよとるの白の

百その書れ中に 順徳院御方

ふかぬ露糸とけりふはとるあけけらゆり妹を

秋夕

中務卿親王

暮らぬ秋の夕夕あふむ物さへもいづれをいふ人

権方中に

権大納言教家

我ふとゆふあふむれも程程の秋の夕夕あふむ

右京康徳下

よそにゆく雲ぬれ秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

藤原門院少将

弟の葉の露も我身はあふむれもいづれをいふ人

百の秋夕中に

順徳院御方

くさり物さへも秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

ゆふの秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

むす

後鳥羽院御方

ふとゆふあふむれもいづれをいふ人

正三位知家

いづれも秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

月夕

平義政

あふむれも秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

後三位忠通

あふむれも秋の夕夕あふむれもいづれをいふ人

権中納言長雅

ふれあひの神とやわすれぬ月とよもむと涙を流すらん

後二位成実

く霞り我身ひとり秋とて神の涙は月と見ゆ

行平朝下

身はさびたけぬ秋のころもつら神よと申すは月夜

雅成親王

ふみて身とて人知の月夜はるるに秋はあはれ

秋の懐旧とてつらとよみ納けり

前大納言忠信

老らく我身は老かたれは道は昔の故の月

よもすらん月と涙らん

東三条院

よもすらん月と涙らん昔とて神の涙は

八月十五秋月兼せはと納けり

天曆御奇

月毎よる月と涙らん月と涙らん月と涙らん

都 一 らす 前大納言忠家

あはれ我身は秋の月と涙らん

よもすらん月と涙らん

けりの中に 入道前大納言

しんも我世おねとらるんはくも月と神もとて
ほき羽院くもあまたりゆけりも此
いのもふらやして廿日よのらまうり
してきりとなをともおかをくわん

兼仁法親王

しんも神もら月のはあも出もて
部一らす 順徳院御号

ゆえの雲井れ月やしえおらん霜よわむらうき
右善忠徳基氏

ひん玉のうれ枕よそくおんといふもいふよりあ

廿二方小月と 中務親王

露をぬ神も月乃彩は波や林のそととらん
弘長元年百三十一

友原信実御下

くも思ひぬ物と秋のよれ月よ波のそととらん
百三十一方中 順徳院御号

あつたあともそそらん鶴あけいもはなのお葉
秋方中ふ 能因法師

夜乃日彩よとせくもあつたそそ付もは
老母は落葉とて 入る前を改大良

よきとみまはし涙そふりまらぬとくふれはの海

題不記

友原徳清下

木葉と風のしそりりあふたはる涙も枯れぬ

源親行

善の秋と行かぬ空あふと神より卯小程と道

仙中國隅河とふ心寺ふく

僧部玄賓

尚りつ徳のふとそ秋とそおとふ人良

長月のしとりのとあはふらとふ

きととあふ

右道之將道徳母

神おととふとふたけはつ身は河をたふと

神を月乃は心ふれ山たよゆきつ小町

ゆけり日女房のりしををりゆ

前た上良

とくこのとふとふらつをれ都のふのつと

水色のみ

水上天宮

とくすともとふら里れ神河ふらめらりみらふと

都いらす

平春河下

山川乃ちやふとゆか下にあのふみそりる

は平賞寛

栞の屋よいれとてしるふりそ神よと海に渡ぬり

源具氏御下

本乃しれいせいのとてしる河をよとていふとてふとて

山河をよ 中務の親王

こよくと神をせよや世のたのみえぬ山河に登る

冬うらとて 衣笠前田大氏

神を月河をいりとりぬとて我身はよとていふとて

ひれ月とていふ雲の晴よとていふとてや我身は

えそとて梅の 小つ河をよ

有原範忠御下

風さうくつ乃れれびとて雲ふとていふとていふとて

中務の親王家百とていふとて

前た昔東徳教定

徒よ海とて神を月我身よりわら枯るいふ

平政村御下

志とていふとていふとていふとていふとて

都一とて 後二位家澄

くつり雲あふれふとていふとていふとて神を

百とていふとて 順徳院御下

つとていふとていふとていふとていふとて

平政村御下

建保四年の百廿二

僧正行宗

とふとまのねむとふとみまふしし時ふり

題不知

侍従具定

ついでとふと飛ふとまゝのゆりはなれ初書

冬方中に

友原伴信初書

ゆり初ていつ日とふと書はらふゆりとのまゝ書

平親清女

風もよとふと書は書まゝのりこ書とつ月乃新と書

正二位知家

初か〜よとわのみつす後ひこの書よつと白書

暁書と書と

西園寺入左前右政左后

とるもえふ書と初力もつりとてぬ書と書と書と

冬方中よ

中文権大納言

ゆりのねい書とらふとゆり書とらふと書とらふと書と

はる下と書と寛ととめゆりつ七午と書と

皇太后左大臣後成女

ついでと書と書と書と書と書と書と書と書と

歳書と書と

信生法師

老ねと書と書と書と書と書と書と書と書と

入納云通具

いふに月日書とほりつて我身よりわろ年世業

友原信美朝臣

年とらひてとらふ又書にたりあされおろし

光の子と

續古今和歌集卷第十八

雜方中

神龜元年十月紀伊國より吾村あり

山名と赤人

わかれ浦よとみらるる道とてあふと書くとらてあつた

然中もよとくくくして得たる時よとけり

中納言家持

漆風さし吹きあいの道よつまよひしとていふ

野一らすよみ人不知

難波こゝ志やいふもらてみ海をい渡河の橋よとけり

五百名以上の中し

坂鳥羽院御奇

明和七年松原より大津に在る月よりありて

寛政二年百名以上は鶴鶴

大上天皇

をくさるるはゆよゆりする門をひらけり

後二位成美

友鶴のしほはくさるる者よりゆきしは善美のしほ

百名以上の中し 前右大臣忠

くさるるの命ありたるはくさるる友鶴のしほは独唱

志ふか

小野小町

清平のあはれはゆきしはくさるる者よりゆきしは善美のしほ

一人

はくさるるはゆきしはくさるる者よりゆきしは善美のしほ

志ふかよりて七首より一人はくさるる者よりゆきしは善美のしほ

はくさるる中船と 大上天皇

神のやちとゆきしはくさるる者よりゆきしは善美のしほ

洞院行政家百名以上は眺望

友原澄祐外下

明和七年松原より大津に在る月よりありて

むふふ

平泰河約片

世と海らあまのふみあひのふてならんひふふふふ海を

園勇法師

あねふふあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

中務親王

立よりみくもゆめあねのめやじけふふふふ海を

月照法師

後京極坊政前太政大臣

ふふのあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

布引法師

孝主補親

あふふふのあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

たふふふのあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

源俊賴卿下

ふふのあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

子五百番ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

風吹ふあまのふみあひのふてならんひふふふふ海を

中務親王あひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

藤原院師

あふふのあひのふみあひのふてならんひふふふふ海を

八幡寺首ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

を

有原信実下

里をこゝろとて浦みえりて膝ふし舟中を
都へらす 栞本人丸

ふしつ徳も何ぞもいふかやもいふ波また
武部つう合 白雲

嗚の音ふみえはうらふ浦乃若らす波のそけ
百それ水方乃中に野々

土御門院水方

ふしつ徳も何ぞもいふかやもいふ波また
三百それ水方乃中 中務の親王

み海せいふが風ゆしひめさや小松うらふしつ徳

佐右社ふまゝてけりうらうらうらまてます
中務の親王に 清少納言

ふしつ徳も何ぞもいふかやもいふ波また
徳聖よゆしてゆしつ徳は佐右社
ねと 春上天皇

ふしつ徳も何ぞもいふかやもいふ波また
亭子院より母とていふかやもいふ波また
ふしつ徳も何ぞもいふかやもいふ波また

延長御前

未あえぬ若船入河のありやいせの心れ中々ゆえ
曰院ありふれたりし御ありけり日松
老とふとくもむとくふみゆき

泰後作傳

はふく年いふくちかふとくふみのさかやみ
坂上是則

ふ川の合れ松老よりゆきふもゆきおとやゆき
都しらす 中務

大か同くふとくもむとくふらふねけり世あ
老と仙洞とくふもせ給し方れ中に

其上天望

我宿乃抄ゆねわじ心ゆふまをせて落流つと
三百首方れなるにゆき

在のりや別いりままかこれ浦は月そのにけ
後法性寺入る前関白家百そまよ

後法性寺

と海とくことと月けとわきぬとやゆきあふ
子我集よ素覚は師とゆきあふけ
わだうふとつまそやまらととひて
ゆける 素後法師

月影の如き井浦の川より子孫の如くも
新院の如くはくぬれぬも
とむあまのくににたふさむ
とむせ
とむげつ河
少将内侍

吹風とのまらむの都多にまらむ世は
源氏の物語のすまはれぬ
よりりげつ河より
月花内院

漢子る如くもみと袖あきて昔ふく
醍醐入道前太政大臣
とむ

とむよ漢平乃浦地のりか
むらす
よみ人ふ知
あまのとと破よ我身
然聖ふ籍約とて石代漢
前中納言資実

石代の中ととと我身
述懐方れ中
後二位家澄
ふと我ん
建保四年
ませ始り
後鳥羽院御

そのつゝふらぬし物ら色何れもそめ夜露や露草

先的蒙名も今た前按政官

写りし海首ふらつ波のうまふ海ひのうまやありま

お振起のふれなりふ國

天上天皇

久堅おあらしおると玉をたみら何うまもとの結

洞院按政家の百三三

入道おた政大臣

世と照と月日の光みうまひよふしとふふらうを

日本礼と見ゆて継神天皇と

岡白おた大臣

くしおまふし後ひそつらまめわねるあ月

西暦二年七月方合よ水色月

西園寺入た前政大臣

善相河をたの道いあようまそそ人のん月よわ

都しらす 友原為總執下

我のや入の波し神おそそつら新と月よま

中務つ親王家百三三

前内大臣 基

ひそらわまらうつと家たふとせらぬ海月あ

月方れ中ふ 中務下親王家志玉侍
りふふいふとあてまの月をうさ世はかたし
な原信美下

あすのこひをうさ想さよこのはつと月と合ふ
せとのことていひしらよこりあてゆき
月をみく 権中細玄義懐

ちをれ者あまの月影と都よゆてみそ想ふ
部一らす 梅家使階綱

奥ふよ月とのことあふ心とよつたよ
子五百番方合ふ 前大細之忠良

りよとふいつらつゆえん心よりふきと美
秋乃は心とまよりてよゆけり

東之條入る前雲白を好む
建長三年九月十三日秋十を合り
山家秋風 入道前右大臣

あ者大長
吹風とよよけふまらるるあふ秋の望
あつてあふ心と山家秋風を好む
部一らす 中務下親王

くまのしんせんとていふいふのたもてい
穿心述懐と 権大納言形綱
とていふいふとていふとていふとてい
くまのしんせんとていふいふ

権大僧都定因

くまのしんせんとていふいふのたもてい
右普東緒基氏
権一ららのたもていふいふのたもてい
右原基氏

くまのしんせんとていふいふのたもてい

権一らす 前大納言為家

くまのしんせんとていふいふのたもてい
大御門院中

くまのしんせんとていふいふのたもてい
心路の百とていふいふのたもてい

くまのしんせんとていふいふのたもてい
とていふいふのたもてい
とていふいふのたもてい
とていふいふのたもてい

とていふいふのたもてい
とていふいふのたもてい

述懐のこゝろ

よりふやんそん今といはれりあつて月夜思ふ

後鳥羽院御寄

世中びらうたの事ん何と云ふ所は此園のあさ白浪

藤堂門院御寄

おとろいから園せいの物とあつていふあつてのあん

源光朝

園いふうらむとたて何すといふりむいふいふ

人々此の題して方々いふ

正三位知家

とて河我身ふりあつたの波をせしらくあつた

都くらす

あふとたつと波よありまけりといふて年のあ

友原光俊御下

とてあつた神うらわじはあれ末とていふ物あつた

大内頼重

あつていふあつた水鏡といふあつた神れ

百その水方あふ 順徳院御寄

とてあつたあつたのわかれあつたあつたあつた

述懐のこゝろ 前田大長基

何ものもあはれとてひてさかたに世よしのふらん

貞女上人

果てなく涙の露はまきれば何のあつ玉の如き

老人述懐とて

平政村朝臣

ふかしの秋のりおはる老と重てとて新か

道玄法師

はらり昔の末とたのまねを老そりてあはれ

百のうをりけつふ述懐と

入道前太政大臣

まじも教とて老の波あらぬふまをいふ

然時ふとてゆるり何ういふとていふ

首の髪原の雲とてふらりすそぬれは

正一らす 貞昭法師

あはれの尾上りなれは芽原あはれは

有原基政

みせを思おても思われとて昔れあはれ

順徳院御前

水の面おひてさかたに世よしのふらん

五の百のうをりけつふ

後鳥羽院御奇

人の心はそらりの時中此情の非とも
世にらす 後三位頼朝

行末の世にたれともうらたれにさうりおぢえや
福免して心いともうらたれ世のあともまか
百そふちりしお囀と

入道前太政大臣

昔今心ひのらぬおえか囀りり物ともせう
にけりしとらみゆけ

衣笠前内大臣

囀乃鳥れ善こぬ心置おえそらの程とけりけ
前大臣おみか

牙とらおえの涙やあまに鳴つてさうおれお
入僧正階弁

うけりのおえと非よあひそく囀るいもあらん
建保四年の百そふ

お中納言定家

ゆねそり付るお心と也誰か別の神ぬすらん
閑路鶴と云ふと心あはし

雲乃すもゆららぬお心とあはるおれお
お

巻一 下

蝉丸

あけの雲れ風乃をきくこゝろあわてそ

わらわの母とよみんそ

續古今和歌集卷第十九

雜言下

寛治二年丁酉三月廿七日

入道前大臣

海東やあまの波のそほしゆくぬらん雲はしらさ

前大納言

の海々蕙やあまの波まよらりゆのふみらうさらぬ

洞院持政家百三十一

源家長頼

伊勢のうらまひなるの沖よ出くぬらふとこらぬ

源家

後鳥羽院よきりげり首そり

友原秀能

風吹いたまの鶴とたのびんくうに出るあまれ物身

部一らす

前大納言為家

そ海うへゆめの橋けり志やふらむそのり海土踏身

中務親王家百そり

友原光俊頼下

月出しくううまふのほよりなすく何戸物身

弘長二の勅撰乃りそりおかせしれくのら

十そり海船しふ海色月と

わが浦やまぬ志やらふそり出くみふあまら海を月とみ

月方けりふ

中原新実

更けの陰のりそり整あつたりそり河の林乃月

右近中将源平

我乃り物ふそりそりそり海そり母のまひ月とみ

ののまふそりそりあつそりそりみゆき

膳室上人

弟乃庵と月となふそり出ぬそりそりそりそり

部一らす

土御門院法奇

雲おらりやそりそり秋の月いふそりそり海とみ

前大納言伊平

月影むくのきやゆらぐらんあもつゆぬ袖の涙

百舌方中に ち開白たえ居

朱なるあま道昔とさひ出で牙乃徒よ月とみん

あふらぬの家を月あつるにけり秋むら

とさひ出でよみゆけり

後杉野下

いしの面影とらふとさひ出で思ひこころとあつ月

月前思往事とさふと

中京師 季朝臣

いしとさひ出でけり思ひこころとあつ月か

むらとさふ 西音法師

昔と涙のあはれやと月影の都ふとむら

道命法師

とさひ出でけり思ひこころとあつ月か

秋影對月とさふと

大空寺 庵家寺 澄後

月みくあまはとさひ出で我とけり思ひ出で

月前述懐とさふと

後法入寺 大空

今我月色なりしめこれやぬんこつてこのことす

小笠原方合よ曉述懐と

正三位知家

我も又このいらく左の月と夜と絶せしめ

むふえ

惟明親王

ゆりよそらみよのひらふとつらふれんかひ

よみ人しらす

いふこのことぬと我みくもせぬぬあはれ

人丸

年つらとよそら山花のこもくもこの昔は

あふく河善治はまはりのゆをうめいふ雲は

子丑百番方合よ 望を后をみす後成

あつらひなりとけりはたうぬおれはる白

百首方合よ 野行者と

後京極坊政前太政大臣

芥河の波も昔ふ立よりみゆさるえをさる

建長六年正月柳中朝信一約ふ

美影とくさつてすそけみいさ

つげさせ給けり 太上天皇

くさといふんそあすらん昔より月とあま

かひ

長

正三位知家

身はくまひはたぬのりく久きけ我君乃
百その中し 土御門院中

はくまひのふたいうらんをえはほのちかき福
郡一らす 中納言家持

多きなる命とす。松えと結ふんくさくとて
任者よ福とあり 友原基澄

任者よ福といひをきこゆふんくさくを松の風か
任者社方合ふ 後三位彰俊

徒よこもつるの浦よあつ松を我身れあといひ
ち新乃松とて 熊因法師

いづく小我身もふりぬき砂の尾上ふあそ松独
見よきの雲と 友原基俊

世よけえりえんはのふれみけの松よわらりす
伊勢よくさりゆけり此歌季ののりつ

いづか玉くれふみかして鶴の草とてあそ松
長

あそ松の伊をれ候萩吹風乃折ふいそ急とて
正三位彰季

述懐方中し 友原基俊院下野

新米の粒より卯の卵より昔のよき人よしとん
とていふこと人の心はつたすといふことある

和泉式部

あつしり昔はとていふことあるのよき人よしとん

懐旧の心と 友原信実の下

いふことあるとていふことあるのよき人よしとん
とていふことあるとていふことあるのよき人よしとん

前大納言の書

あつしり昔はとていふことあるのよき人よしとん

友原仲敏

中へいふことあるとていふことあるのよき人よしとん

平長時

中へいふことあるとていふことあるのよき人よしとん

光の好むもの 入道前大納言

いふことあるとていふことあるのよき人よしとん

むしらす あつしり昔はとていふことある

あつしり昔はとていふことあるのよき人よしとん

友原澄祐の書

いふことあるとていふことあるのよき人よしとん

藤原光俊の書

あつらひのわはしほふとよまを分れあまてとねらうけり
二百首方傳傳し小述懐と

前大納言為家

此地録のたふさうの録ありけりあつまてとねらうけり
百首方よ

たふさうの録あり

録ありけりあつまてとねらうけり
たふさうの録あり

後系権持政前太政大臣

八雲ありけりあつまてとねらうけり

十首方中に

あつまてとねらうけり

厚もあつまてとねらうけり

述懐のらと

侍伝のらと

今も又此の録ありけりあつまてとねらうけり

子五百首方合ふ 深具親下

厚もあつまてとねらうけり

老の故部とよまてとねらうけり

とよまてとねらうけり

厚もあつまてとねらうけり

厚もあつまてとねらうけり

厚もあつまてとねらうけり

父秀能よりつとけりし時より

藤原秀能

神おすくまぬよりりか系とて此のわがを

中務ふくせられけり山系子れねくふ玉

さねわきよとら露りりとかさる竹を

とてし

天曆贈大皇太后

みまにけりかよとせぬ玉所の業をいづるに

述懐奇ふ 大上天皇

いふまにけりよのけれいといふの道おとす

光のほよとけり百とらあふに

後二位家澄

いふまにけりよとてさた人となすねふ

弘長二年百とらふ 入道前大政大臣

いふまにけりよとてさた人となすねふ

いふまにけりよとてさた人となすねふ

いふまにけりよとてさた人となすねふ

前大納言忠良

いふまにけりよとてさた人となすねふ

堀河院山時百とらふ

後醍醐天皇

是所のいふこときく女はきりしものいふこと
夕言はゆえにけいふこといふこと
なして

日くは竹のそけふよわる色風こいつとあきき
空ろ露述懐 友尔巻後

何といふいふ人お露のうれ我身といふあきき
建永元年和方取の述懐三言句に

前中納言定家

いひをく露るふふれ思ふ事よそたのむ身消ぬ
夕のいふこと 土御門院水方

夕言入あききしはさく白雲おりの中女持の思ふこと

百その中それ中の 順徳院水方

善きこといふのじりのいふあききたきおき今の念

述懐句に 後二位近衛

いひをく身れらるる乃思ふこといふこといふこと

ゆつこと山寺いふこといふこと

鴨長明

いひをく宿るは好いこといふこといふこと

塩川院水方百その中よ述懐

友尔形仲朝臣

後三つ一もきわいよきい我のよきといふてあ
郎一らす 友原基澄

ありきりきり我のよきといふてあ
源俊定郎下

すまじきいさだせふいふのよきといふてあ
後三つ一もきわいよきい我のよきといふてあ

いさだせふいふのよきといふてあ
亭子伝次郎

草とつらふいふてあ
三首それ中に 冬上天竺

わらうらふいふてあ
奇美速懐と 岡白前たふ郎

たふそこのあてふたありそあてわらうらふいふてあ
百そこの中に たふ郎

はあそこのあてふたありそあてわらうらふいふてあ
弘長元百そこのあてふたありそあてわらうらふいふてあ

ゆとつらふいふてあ
中務つ親王

あつらふいふてあ
侍従の家

ふらふらとふらふらとせれあふらふらと者とをきみ

源具房宛下

ふらふらとふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

権僧正殿真

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

信美宛下

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

老後述懐とつらとと

祐威法師

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

蓮生法師

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

中務親王家にてあふらふらとあふらふらとあふらふらと

小破とつらとととつらとと

大僧正澄弁

あふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

選子内親王が後あふらふらとあふらふらとあふらふらと

のらあふらふらとあふらふらとあふらふらとあふらふらと

入道若部之照平親王

久そふそふあそふみあま八十甲のたふひ
むす
後鳥羽院御奇

あまそふたふあまのむすあまのむすあまのむす
秋述懐と云ふ
云洲門院小宰相

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
平政村御奇

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
中務親王家御奇

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
権少僧部云綱

述懐と云 平時廣

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
寄老述懐と云 前大納言為家

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
百首四方中云 頂法院御奇

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
開白前た云旨

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
子五首方合云 赤陽門院越云

あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす
あまのむすあまのむすあまのむすあまのむす

中務の親王家百三十一

友原徳法卿下

はつとよきと云ふも多て辛くおつた時母と云ふ

述懐方おまゝに云ふ約けりふ

は中下歳惠

はふとのまつをせられてそむく身よと云ふは

個院拾政家百三十一

正二位卿家

そむくは我母やうらぬらんよと云ふは

建保四年の事なりけり百三十一

慈徳大僧正

身より程もほせとそむくやんかゝる君ふあつて

あゝとす 俊頼卿下

世中おぼしき身程と云ひ思ふ人よみえわ

入道前を政大臣

よりあゝそむく世よりほくはらたあつて

思ふくはらたあつてを約けり

正二位卿家

はつとよきと云ふも多て辛くおつた時母と云ふ

東山院の皇太后殿よりおつたはを約けり

山内息持考に 東三条院

身とつめ神そおとわらわさ衣心いあ人神の家さ
上東の院さうりむら山を拾けり河さあ

赤深考

ひきりこころんせむいさくまはうのりけり

もこののりけり人その山ま

年へおらうとそむくやさうて中ら

一けり 安家の院志考依

らそふありしもゆぬ世しとそむくこと

有原仲能考下出家してゆきつこの日

うけり 後二位為继

ありおとゆぬ社の秋がせつぬふふゆさうらん

そり 有原仲能考に

神のへりしおとわぬあうおあ月はむ社風歌

出家の故もゆけり

前大細云基良

ますこふとぬあふれいんあまを文あう面歌

明教法師

うんこふあゆしまことひよ整りあけり雲深の社

小侍後

右近大將通忠

一とらふ人んはしき世にあらふもて身そふ
名並前内大臣

たふ世の人そふはしき我んそふはしき
兼身法師

ふれはしきおかしきそふはしき
壬生忠景

ゆれはしきおかしきそふはしき
小野小町

ゆれはしきおかしきそふはしき
大御玄良教

ゆれはしきおかしきそふはしき
述懐の方中に 権少僧都云

ゆれはしきおかしきそふはしき
清輔おかしき家云合よ述懐

ゆれはしきおかしきそふはしき
祐盛法師

ゆれはしきおかしきそふはしき
兼律師永親

ゆれはしきおかしきそふはしき
あ久御玄伊平

いひてはねていふも母のいふに似たり
光の影も入道前按家百の中

有尔光後約ト

今まてもあるといふが
迷懐よりいふに似たり

いふはよもいふて母のいふに似たり
善くあらん

續古今和歌集卷第二十

嘆奇

後朱雀院むしめし
いふに似たり 一条院御奇

二葉より枝のよもいふに似たり
延喜十のころ乃山屏風の奇

躬恒

いふに似たり
上東門院入内山屏風より
花山院御奇

色に枝うつりて嘆よりの世も我世も今さら

入道前太政大臣

冬ふりて白梅もわらふこころのちよき

前内大臣 于河内道守将

よりあてしはさす梅花あまの子と母の志を

水より乃ほのあゝあゝとて

入道前太政大臣

このまをこのまにけりしそら

富家入道前関白少将とて石橋の藤河家

舞人けりあゆむる時京極お関白の家

てあまをかくてりてをせり

源頼朝

嘆きむらりの花は世とてこたう

嘉永二年三月を好よし新章約る河内池

上流よりとて梅をいれり

中御門右大臣

子母とて庭をそとあけ池あふゆ

建長六年三月西園寺とて

梅と 前大臣

年くろみゆとて梅の花をい

内裏百々より禁中歌

たふは

しきまらしてそむるふき風志つるあつ雲はかへ

三月三日屋義公のりりいひよそつり

けり
紀時文

二子代てりりふ枕のよ急るよれ歌の巻の巻

た右ちおとあひりて寂勝梅よまひり

ゆけりといひつり

後鳥羽院下野

友波の巻りあゆみよふんよこえんころ梢よそ見ら

せー

入道前を政公信

さひやみよこの山れなる花咲るし所はんつるそ

は成寺入たあ折政ふりあては又あま

とせらりけり出せらるふんそそみつるまふ

つ進ていんそみく養一ゆたれいひけり

りされけり
後朱雀院御奇

たつ進ての初末とそあつるさい君とそむい陰とそ

郁芳門院乃根合の奇

去文不更所粧

あつれおる若きはのあやめ弟装りていん君とそあ

建保六年八月十三夜中殿裏に池月之的

とつらん

泰後雅集

池水よ岩なりからんらんを石の敷しつらんふとあつ月

醍醐入道前太政大臣

君代の子せぬいとらそて月やまことやとある池の

建長二年九月十三夜三合り

前中納言雅具

世と照よよりれりやれ月影の秋つ鶴木の卯とさ

宗法院の山阿比金剛院に於て

菊契子秋とつらん梅せれけらふ

侍賢門院堀川

雲のふれ星とつらん菊のふれとそ子世は輝^らる

九月とつらん菊契と

聖武天皇御

りあふらんらんを菊のむ白ひそまらん菊の秋

雲のふれとつらんを梅せれけらふとつらん

くせ梅けらふらん梅のこもつらん

つらん梅けらふらん梅せけら

後朱雀院御

天地とつらんを梅せららん梅せららん

たふ臣の表もあてまつりて年月了のら
さふ臣大旨は短くゆくる時入るあは
たはあてて歳言れうのみゆけりふ

前大政大臣

雪つり松老本とふりよらに短く年のも
祝ふうのゆけりふ

後京極坊政前大政大臣

神せやんすそのあられう月日とふし
後鳥羽院むすれさせゆくる由五十日
は成寺入るあ坊政ううあもゆけり

兼式部

ふふのあはれをわらせのあきらまき
洞院坊政くふ百とふうゆけりふ
兼中納言定家

源家長下

君とゆつるあはれをわらせのあきらまき
兼中納言定家
ふふのあはれをわらせのあきらまき
兼中納言定家
入道前大政大臣
ゆりぬるあはれをわらせのあきらまき

文永二年九月十三日奉方合ふ河月と

前関白たふは

兼代より今そそん月をあらけとてしむせきおなほ

物とつらそく方よあらせゆし小他家秋

具とらふとて 大進中将云雄

兼代より始とあらぬのえはとて可の山は九月

崇徳院百とてふ 皇太后后文とて後成

兼代よりえはとてふからとてんをとてし

兼保二の二月大お川の行きふはとて

てふみゆけり 前中納言直房

大お川世よりいひとておはりのみおはとて

は集りてとてふとてしとてみとて

てゆし 前内大臣基

ふのふとてはとてしとておはりのみおはとて

也し 大上天皇

おはりのふとてしとておはりのみおはとて

元久二年三月廿六日新古今集竟第

こあらとてしとてふとてしとて

坂高羽院河

石上ゆらとてしとてふとてしとて

後系松栲段前太政大臣

安徳を屋敷より移すはしてむらひ玉ふみか松より
故は性寺入る前雲白家百を方より

後惠法師

君代つりぬる小あまをり神と子せよまを
石よ海松のおひさるる方より

惠慶法師

うこれあま君が小松平より松の子せよ飛ぶ海松
建保三年六月和方前のかき合
松維年

権大納言忠信

限りあま河も君ふあまをり松の松末世にあ
祝方れあまに 鎌倉右大臣

君代を我よりは石川や世の小川を海松と
文相よりさきあまをり代よしそらるるまをり
後三位頼政

君代はけりし松をりしむらひもつりても松をり
むらひも

神あいの山はるる松をりいひてそむり代にあ
人峯しむらひもつりてもみゆけり

僧正の志

何れも公を聖徳の徳とて君をやらぬは

や公の徳も公の徳なりとて照見り

正元二年大嘗会の比より

中務の親王

とてこれ位の公小松原とて

日本紀竟業より治國入君五十稜牙天皇

清徳公

池のふりより分るるなり

後朱雀院御河大嘗会屏風

贈系後義忠

照月のつれよあわてく

義保元公大嘗会主基方屏風

石坂公 前中納言直房

いりより山姥の

久壽二年大嘗会

多田の永範

何れも公の徳も公の徳なり

建暦二年大嘗会總紀方屏風

山

お中納言實實

とらねあまの山に松吹く風を美状の志
仁治二年大葺舎屏風奇

大葺舎屏風奇

多かりそ中れ松原整りそとらねあまの志

子五百番方合よ 土御門内大臣

りあまの志の山に松吹く風を美状の志

後二位家澄

久堅乃天れがこやまを晴て出る月日を我々の

よめ

